虫めづる姫君論

A Study of "The Lady Who Loved Insects"

中嶋　尚
Takashi NAKAJIMA

はしがき

堤中納言物語十篇の中でも、たぶん著名度第一で、アーサー・ウエーリーの英文訳により世界の文学の仲間入りをし、室生犀星の「虫姫日記」など後世の作家に興味を抱かせた「虫めづる姫君」物語（以下、特にことわらない限り、物語という語で虫めづる姫君一篇をいう）の成立年代、作者については、現今のところ全く不明であるといってよい。物語中の和歌が、その語彙や内容において通常のものと異っているところからであろうか、風葉和歌集に収録されていないので、成立事情にひとまずの目安をつける基準が出しにくい状態である。また、この物語の言及、引用についても、今鏡の藤原宗輔の蜂飼いとをあわせて引いた、冨士谷御杖の「北辺随筆」。また、狭衣物語巻一之上のかたかな歌とあわせて引いた、北山久備の「勇魚鳥」（「安斎随筆」についても言及がある）ていどしかないのではあるまいか。状況は不備としか言いようがないのであるが、かえって外面的な事情に寄りかからないで、その本質を考えることもできるだろうと思う。以下、いくつかの項目を立て、そのもとにこの物語について考えるところを述べてみようと思う。

一　題名をめぐって

前田愛氏の文章を引用する。「文学テクストは、それ自体曖昧さをもったテクストで、さまざまな解釈の可能性をはらんでいます。そしてその解釈には誤読もあり、また逸脱もある。あるいはまた作者自身が意図しなかった新しい地平を開く読み方も考えられるわけです。そしてまた、文学作品の読みは、それ自体恣意的である、そういう考え方もあります。しかし文学テクスト自体には、予め読者の読みのベクトルを指示する指標というか、記号というか、あるいは構造というものが仕掛けられています。テキストの組み替えないしは読み替えも、そういう指標に対立するものを打ち出すか、あるいはその指標にそって読んでいくか、そういうことになると思います。その読者の読みを指示する指標、これを仮にコードと名付けてみたいと思います。このコードにはさまざまなレベルがありますが、たとえば文学テクストにつけられているタイトルがすでにコードになります。（中略）そしてテクストというのは、いうまでもなく、はじめと終わりをもっている一つの閉じたシステムであり、その閉じたシステム全体をくくるものとしてタイトルが与えられている、こういうことだろうと思います。[注1]」

いつからかこの物語に与えられている「虫めづる姫君」というタイトルは、さまざまな読みのベクトルをわれわれに提示する。王朝期宮廷文化の美学に従って考えるならば、虫なることばによって想起される内容や意味については、枕草子「虫は」の一段に見られるように、鈴虫以下、和歌の素材として情趣の世界の点景となりえたものや、みの虫など価値的に低いものと考えられながらも、小さなエピソードの内に取材されうるものをいうのが一般であった。ちょうど、源氏物語鈴虫の巻で、秋の女三の宮の西の渡殿の前に作られた野の趣の場所に、秋の虫が放たれ、やがて虫の宴に移って行く小話に見られるような、いとも雅趣あふれる世界を私たちに連想させるのがふつうのようである。ところが、この物語における虫は、世の常の概念におけるそれではなかった。「かは虫」（和名抄に「烏毛虫」の訓みとしてのる）を主役とする、名もないような虫たちであった。この提示のありようの意外性に、まずわれわれは驚かされる。ちなみに、枕草子「虫は」の段に登場する虫たちで、この物語にもあらわれるのは、三巻本によれば蝶とはたおりのみである。しかもそれらは、枕草子的世界において捉えられた虫像とかなりな相違を示す。蝶は、「蝶めづる姫君」という言述の中にはめこまれ、「虫めづる姫君」の対概念として存在するもの。世に、花や蝶やと総称される美意識の一般的な象徴として紹介されたものである。更に、はたおりは、「はたおりめの小袿」と姫君の衣裳の模様としてあらわれてくるもの。いきいきとしたかは虫などを良しとする姫君の衣服の意匠として、正統的な価値観を持つ虫が、押絵のように、化石のように登場する。このありさまを、不安定な状況の提示、また価値観の倒立として、まずわれわれは感じ取ってよいのではないだろうか。

更にことばをついで言えば、この部分だけを読んだわれわれは、「虫めづる」といわれた場合の「虫」を、まず、いわば枕草子的な価値観で把握するであろう。「めづ」ということばも、そのレベルの解釈に対して何の異和感も生じさせない意味なのである。「めづ」とはふつう、以下の用例のように、折に触れて生ずる雅趣あるものの姿を愛好する、またほめそやす、その気持ちのありようを示す語であった。

もみぢばの散らふ山辺ゆこぐふねのにほひに米伍弖いでてきにけり（万葉集・巻十五―三七〇四）

雪月花の時と奏したりけるをこそ、いみじうめでさせ給ひけれ（枕草子・村上の先帝の御時に）

あさけの御姿は、げに人のめで聞えむもことわりなる御さまなりけり（源氏物語・夕顔）

まこと、「めづると云事は。花紅葉月などを見おもしろきと云事也」[注2]と言ってもよいのである。

ところで本文に入ってすぐ、われわれは、同じ語構造の「蝶めづる姫君」なる語句に出会う。枕草子ふうに言えば、蝶＝虫と考えてよいものなのであろうから、この蝶めづる姫君の隣家に同じように「虫」をめづる姫君がいたとまずは読める。ところが早々に、この虫めづる姫君は、「人びとの、花、蝶やとめづるこそ、はかなくあやしけれ」[注3]と断じ、「よろづの虫のおそろしげなるを取り集め」たと説明される。私たちはここで、「虫めづる姫君」の「虫」が、世の常のそれではないこと、すなわち、美意識の世界での常識的なものと非常識的なもの、あるいは、正統（正常）と異端（異常）など、二元的な構造をこのタイトルが含意しているらしいことを、一気に領解するに到る。これが、この短篇物語の読みのベクトルとして仕掛けられている、指標としてのタイトルの意味なのではなかろうかと思う。

二　構成をめぐって

一般に物語文学の基本的な内容は、結局のところ、もろもろの男と女との話柄であるということに尽きるように思われる。その場の構成

の仕方によって、また表現の方法によって、一回的な男と女の関係が多面的な相のもとに表出されることになるのであろう。虫を好む姫君の話柄は、それのみを取りあげるならば、ふつうの物語の主人公というわけにはただちに行かず、むしろ、説話的な文芸の素材たりうるものであろう。人ぎらいで虫のみを愛好している姫君の存在を描くことはもとより可能である。しかしそれが、いわゆる物語の話題にふさわしいものであるのかどうか疑わしい。少し離れた例であるが、源氏物語橋姫の巻で、宇治八宮と薫との男同士の話が三年近く述べられる。これ自体は、いわゆる物語の基本的な内容としては珍しい。しかし、これも結局は八宮の舞台退場のすきに、姫君を薫が垣間見ることで、一挙に男と女との話に据えなおされる。堤中納言物語に収められる十編の物語も、その濃淡こそあれ、男と女の話柄であるといってさしつかえない内容である。虫を好む姫君は、どのようにして男との接点にさらされるようになるのか。つまり、物語のレベルにのせて語られるようになるのだろうか。徒然草四十段は、次のような親娘を描く。「因幡国に、何の入道とかやいふ者の娘、かたちよしと聞きて、人あまたいひわたりけれども、この娘、ただ栗をのみ食ひて更によねのたぐひを食はざりければ、かゝる異様なもの、人に見ゆべきにあらずとて、親、ゆるさざりけり」ここでの男・女の接点は「かたちよし」という風聞である。それが男心をそそるのだが、この世の常ならざる娘のありようを、親はあらわにしようとはしないですましてしまう。虫を好む姫の容貌は、男と女を結びつける物語の常套手段の一つである、垣間見のことがあり、その視線に映る姿によって、つくろわぬものの美しいことが知らされる。風聞はまず、虫を好むという異様な状況に対する興味・関心から起り、それと併行して期待されるべき異様な容貌の紹介ではなく、実情は、化粧をしないだけのものであることが知らされる。世の常の判断を裏切る存在として姫君はあった。それでは、姫君が男の垣間見という、他者に認知される以前の物語は、どのような構造になっているのか。

まず、蝶めづる姫君の住まいのかたわらに、虫めづる姫君の家がある旨の説明がある。父は按察使の大納言であり、親たちの大切に育てていることが述べられる。申すまでもなく、源氏物語桐壺更衣の父は按察使大納言。これをもって言えば、可能な世界として、宮仕えして帝王の寵愛を受ける資格さえ与えられていた。蝶めづる姫君の状況は全く書かれていないが、こちらの姫君に対して、「男女などに寄つつ花や蝶やといへれば」(三宝絵詞序)よろしく、ごくふつうの世界を持った女性であったのであろう。こちらの姫君は、花蝶の世界に安住することを考えていない。現象の内にひそむ実体をこそ大切にしたいという。親は言いかえすべきことばを持たず、結局姫君のようすを、はらはらしながら見守るしかしかたがない。姫君もさすがに気が引けて、「鬼と女とは人に見えぬぞよき」と案じて、自らの言動の世の常でないことを認めている。もちろん、眉も抜かず歯ぐろめもつけない。親たちとの関係は、いつくしみ育てられているものの、その手にあまる存在であったと言えようか。これが第一段階である。

次に侍女たちの言動があらわれる。親とのやりとりの有様を聞いて、蝶めづる姫君に仕えている人への羨望が屈折した和歌の形に表出される。およそこの物語の和歌八首は、世の常でない主人公のありようを背景に、尋常の内容でない。たとえば「かは虫」(写本により、はか虫としているものもある)という素材—これは終始姫君自身を象徴する—が六首にわたって登場する。さてその侍女たちの和歌はいかなるものか。

兵衛といふ人、いかでわれとがむかたないぐ(ママ)しかなるかはむしながら見るわざはせしと言へば、小大輔といふ人、笑ひて、うらやましなど言ひて、花や蝶やといふめれど烏毛虫くさき世をも見るかな

笑へば、「からしや」「眉はしも、かはむしだちためり」「さてはぐきは」「皮のむけたるにやあらむ」とて、左近といふ人、冬くればころ

もたのもし寒くとも烏毛虫おほく見ゆるあたりは　衣など着ずとも
あらなむかし

といった内容である。特に第一首は難解であるが、眉をかは虫めいているといい、歯ぐきは皮のむけたようだと評し、更に七七句の最初の部分に共通に、「かは虫」を詠みこんで、リフレーンよろしくうたいあげていることは、姫君への皮肉・批判の他の何物でもない。按察使大納言家の家風を示すが如く、若き女房たちがちゃんと姫君の周囲に存在しているにもかかわらず、その侍女たちから主人公は浮きあがった存在になっている。「とがとがしき女」が姫の弁護を買って出るが、侍女たちの気持ちは逸れるばかり。姫君はいっこうに応えた様子を見せない。むしろ男の子に虫集めで存分の活躍の場を提供したりしている。彼女には考えるところがあるのである。それは主題をめぐっての項で述べよう。

以上のように、親たちとの状況、若い侍女たちとの状況が描かれ、いわば姫君を取りまく内側（部）の状況が次第を追って報告されたあと、「かかること世に聞こえて」の一文により、良からぬ噂が流れ、上達部の子息が、這う虫である蛇の作り物をつけた風変りな恋歌を贈ってくるという段どりになる。姫君は驚くが、せいいっぱいの強がりを示し、急を聞いてやってきた父によって作り物であることが見顕わされ、返事をして始末をせよという発言で、かたかな文字の返歌が生まれる。この意想外の対応は、上達部の子息の興味・関心を一気にたかめ、男仲間と語らっての垣間見となる。姫君の言動をたっぷりと見聞した男は、ただ帰るのもと考え、「見けりとだに、知らせむ」と、草の汁で書き、かは虫を詠みこんだ歌を贈ってくる。侍女の歌のレベルと同様に、姫君は毛虫に象徴される。姫君はいっこうに動じないが、かたわらの女房たちが心配し返歌をしたところ、男は、とてもあなたにはかないませんやと歌を詠み捨てて退去するという流れになる。この段階では、たまたま顔を見られた姫君と男とは、男の姫君に対する、美しいものの

つくろわないことの残念な気持ちを述べたくだりはあるものの、相互の交渉は併行線上にある。もちろん、姫君の男に対する感情は全く述べられていないし、彼女の主張するところからすると、簡単に男に心を移しそうもない。閉ざされた形で物語は終わるのであるが、最後に、「二の巻に、あるべし」という一文を置く。この一文の理解はいくとおりか可能であろう。享受者のお望みあらば後日譚がありますよという気持ち。実は話はこれで終わりなのだけれど、気を持たせて但し書きをしたという形。また、「となむ本にこそ侍るめれ」（宇津保物語・楼上下巻巻末）などの形がそうであるように、物語を終える技巧的な形式[注4]等である。ただ、紆余曲折ののちに、姫君と男が結ばれるということなどは、まずは考えられまいと思う。それでは、この物語の意想外の素材・発想が活きないであろう。

三　表現をめぐって

1

堤中納言物語十篇の作り手については、逢坂越えぬ権中納言が小式部という女房の作であろう他、確実なデータはない。よしなしごとのような往来物の系譜に近いと考えられる作品は、男性の作であろうとかなりな程度言ってよいのだろうと思うが、はいずみとか、この物語あたりだとかなり微妙なところがある。結局、以下申し述べるような事項を綜合する形で判断せざるをえないのであろう。まず、「本地」「極楽」「夢幻」のような語彙、特に漢語系の語や仏教での用語、またたぶんそれに類した、「さうせんのおや」「けちえん」などの言い方や語彙は、物語のことばとしてはかなり特異であって、姫君にこれらの語を言わせているところには―右の語はすべて姫君の発言の内にある―、ただ単にこの姫君を極端な変わり者とあげつらうための操作であるとは思えない感じがある。源氏物語帚木の巻の博士の女の漢語を連想す

ることもできるが、源氏物語の場合は、女性のありようの一つの極端な典型を提示しようとする意図があらわである。私はこの物語の場合、男性の作り手を予想して良いのではなかろうかと考えているのだが、その点を補強するため、若干の具体例をあげておきたい。

まず、理屈を言い立てて、眉を抜かず歯ぐろめをつけず、「この虫どもを、朝夕に愛したまふ」という部分。すぐ前にある「明け暮れは、耳はさみをして」の同意語の反復を避けたとも思えるものの、この「朝夕」なる言い方は、竹取物語の「朝夕に見る竹の中におはするにて知りぬ」のように、いつでもの意で慣用的に使われるのであるが、朝生暮死・朝露夕陽といった漢語の対句表現の内に培われたものであろうし、「愛す」はもちろん、「漢語『愛』をサ変動詞化したもの。初めは、漢詩文の読み下しの際に使われた。日本人の手になる作品中にも用いられるようになるのは、平安末期からとみられる」[注5]という。この、地の文の表現は漢語文脈に通じた人間の書き方のように感じられる。

次に、「この虫ども捕ふるわらはべには、をかしき物、かれが欲しがる物を賜へば」の一文に現われる「欲しがる」なる語。源氏物語には用例がない。同時代には、枕草子「方弘はいみじう人に」の段に、「飯酒ならばこそ、人もほしがらめ」という笑い者にされた方弘の発言中に例がある。口語的な語とでも評したらよかろうか。古語辞典類はほかに、古本説話集「長谷寺参詣男以虫替大柑子事」の例などをあげる。更に、その子どもたちについて、ふつうの名前ではおもしろくないとばかりに、けらを・ひきまろ・いなかたち・いなこまろ・あまひこなどとつけて召し使ったというが、このようなニックネームを人につけて召し使うこと、この物語主人公のモデルかともいわれる藤原宗輔は、蜂に、足高・角短・羽斑などの名をつけて自由に扱っているし、[注6]栄花物語本の雫の巻にも、三条帝皇女一品の宮禎子内親王家の童女に、をかしき・やさしき・小さき・をさなき・めでたきの呼称の女の童があり、徒然草一一四段にも、太秦殿の女房名に、ひささち・ことつち・はふはら・おとうしという牛に因んだ名前がつけられたケースがあって、必ずしも珍しい事例ではない。ただ、この物語での命名の仕方については考えされるものがあって、たとえば「けらを」は、和名抄に「螻蛄」の字を「介良」と訓んでいて、[注7]それに男の子らしい「を」という接辞をつけたらしい、以下同様と言ってしまえばそれまでなのであるが、同じ和名抄の訓み方によれば、不明の「いなかたち」を別にすれば、「ひき」は「比岐」であって、「介良」とか「比岐」であって、「介良」とか「比岐」の通例の呼び方から「ケラオ」とか「ヒキマロ」とかを引き出すことは、かなりむつかしいのではないかと思われる。これは、「蚱蜢」における「伊奈古万侶」、「馬陸」の「阿末比古」という、同じ和名抄におけるマロとかヒコとかをつけた形の呼称の存在から考えついたものなのではあるまいか。和名抄自体は、勤子内親王の命による編纂物ではあるが、一般の女人たちの常識の世界に存在し続けた文献ではなさそうで、かようなものを利用しうる能才の発想のような感がある。

また、垣間見の男の目から、毛虫を白扇に受けている姫君の姿は、「災難あるわたりに、こよなくもあるかな」と描かれるが、この一文、意の通らぬところもあるが、もし、「さいなん」（写本はひらがな書がふつう）を、三手文庫本の如く「災難」に宛てて解してよい語と考えるならば、この語を収める文献も、たとえば、経国集・将門記・太平記[注8]というようにかなり特異であると称してよい。

更にまた、巻末の「思ひとけば、ものなむ、はづかしからぬ」の「思ひとく」という語。意は悟るといったところであろうが、「うらうらと死なんずるなと思ひ解けば心のやがてさぞと答ふる」[注9]また、「世間つねならずといふことを人のもとによみてつかはし侍し　世中にかしこきこともわりなきも思ひしとけば夢にぞありける」[注10]といった、仏教的色調の濃い、そういう雰囲気において生気を持つ語のようである。上述のようなデータを綜合して考えるに、男性の筆であろうこと、ほぼ確

実に言い切ってもよいのではないかと思われる。

2

堤中納言物語に収める十篇の短篇は、花桜折る少将・ほどほどの懸想・逢坂越えぬ権中納言・思はぬ方にとまりする少将・よしなしごとの五篇が男性を、このついで・虫めづる姫君・貝合はせ・はなだの女御・はいずみの五篇が女性を中心人物に据える形である。男主人公は、「よしなしごと」の僧のような例外を除けば、源氏物語宇治十帖の薫型の人物造型が顕著である。それに対して、女主人公のありようはバラエティに富んでいるといってよい。この「虫めづる姫君」のようないわば特異な女主人公造型において、たとえば先行の物語類の影響は存在するであろうか。そのテーマの特異さから言って、直接的にそれ自体にかかわる形では考えられないように思われる。しかし、話を動かしているいくつかの表現や人物の描き方に、やはり源氏物語の影響が存在するように思われるので、それをまとめておく。もちろん、この作品の成立が源氏物語以後であると考えることにもなる。

たとえば、「はうそく」という、源氏物語に二例存在し、他には例の稀な語が、この物語にも「けしからず、はうそくなり」という、侍女を叱る姫君の発言の内にある。ただしこれは、源氏物語二例のような衣服の着用のあり方を言ったものとしてではない。次に姫君は、按察使大納言の娘である。これはかつて述べたように、桐壷の更衣の父のランクを想起させ、この姫が更衣に匹敵する如き存在に、状況次第ではなりうることを私たちに思わせる。この大納言はその留守の時、娘の垣間見される事態を招くが、それはちょうど橋姫の巻で、大君・中君が八宮の留守に薫に垣間見される状況をなぞっている型になる。これが恋愛物語の開始をつげる設定に、両者ともなっているからである。宇治十帖といえば、姫君の持つ真名の手習いをした白扇は、その黒々とした真名の手習いを強調せんが故の白扇なのではあるが、班女秋扇の故事の正統的な延長線上に描かれた、薫と浮舟との悲恋のありようとはまた別な世界の提示であった。恋愛沙汰は意識下にしまいこまれ、否定され切っていると見ていいのである。

さて、源氏物語の表現の影響の最も顕著なのは、右馬佐たちの垣間見の場面、「かしらへ、きぬ着あげて、髪も、さがりば清げにはあれど、けづりつくろはねばにや、しぶげに見ゆるを、眉、いと黒く、花ばなとあざやかに、涼しげに見えたり」のくだりで、空蟬の巻の光源氏の垣間見による軒端萩の形容、「頭つき額つきものあざやかに、まみ口つきいと愛敬づき、はなやかなるかたちなり。髪はいとふさやかにて、長くはあらねど、さがりば、肩のほどきよげに、すべていとねぢけたるところなく、をかしげなる人と見えたり」また、同じ巻の空蟬の形容、「目すこしはれたるここちして、鼻などもあざやかなるところなうねびれて、にほはしきところも見えず」といったところがあげられよう。源氏物語で光源氏の目は、そのままこの二人の人間造型の核心的な部分をも描き切っているのだが、この物語の場合はもとよりそのようなことはない。軒端荻とか空蟬とか、源氏物語では傍役的な人間についての表現が、この姫君の場合に引用されていることは、いわば作者の、この作品の特別な題材を描こうとするに際しての卑下の心なのだと言ってもいいのだろう。

四　主人公をめぐって

親たちの手厚い養いのもとに、不自由なく育っている娘の、巻頭最初の発言は、特定の誰かに向って発せられたのではない、自己証明の感のあることばであった。そしてそこに述べられた考え方が、以後の姫君のありようを一切規定することにもなる。それは、「人びとの、花、蝶やとめづるこそ、はかなくあやしけれ。人は、まことあり。ほんぢ尋ねたるこそ、心ばへをかしけれ」というのである。「人びと」という

言い方ですでに、自己の生き方を他と峻別したあと、その人々は蝶めづる姫君の如く花蝶やとめづることを常識的な生き方としているという。「花蝶や」の語句は、三宝絵詞序に、「物の語と云て、（中略）以末女幾の中将、奈加為乃侍従など云へるは男女などに寄つつ花や蝶やといへれば、罪の根事葉の林に露の御心もとどまらじ」といい、枕草子「三条の宮におはしますころ」の定子の歌に、「皆人の花や蝶やといそぐ日もわが心をば君ぞ知りける」といい、源氏物語夕霧の巻に、落葉宮への夕霧の想いを叙して、「異事の筋に花や蝶やと書けばこそあらめ」というように、慣用的に、内実のないもの、浮薄なものをいう語句である。蝶めづる行為は、この姫君のありようから言えば常識的ではあるが、浮薄な内実のないものだというのである。そのようなあり方を、「はかなく、あやし」と論評する。思ってみても何のかいのないこと、むなしいことで、そういうものにこだわるのが不思議・不自然であるというのである。「あやし」なる語は、この物語に十二回現れる鍵語の感を呈しているのだが、ここは本来、常識なるもののレベルから見て姫君こそ「あやし」と評価されるべきところを、逆に姫君の側からみて常識のレベルが「あやし」とされていることになる。世の常の評価の世界が相対化されて提示されるようになっている。更に姫君は、改めて「人は」と述べて、あるべき理想の像とはどのような存在なのかをいう。それはまず、「まこと」のあること。真心、真なるものに敬虔に接しうる存在をいうのだろう。当然、世の常の世界に多い虚飾、いつわりなど表面的なレベルが批判の対象となって浮かび上がる。そして次に、「ほんぢ尋ねる」ことが大切だという。まことがなければ本地は尋ねる資格がないというのであろう。本地とは、年端の行かぬ姫君の言述としては、ずいぶん不自然なことばではある。背のびしてまじめくさって言っているらしいところに、巧まざるウイットがあらわれることに注意すべきなのであろう。ところで、本地とは何か。垂迹身である神に対して、仏菩薩の真実身をいう仏教語としての意義が、文芸の用語として生きてくるのは平家物語の用例あたりからであろうか。ただしもちろん、本地垂迹の考え方自体は、平安時代には存在したように考えられている。[注11] この物語での意味が、すでにそのような仏教用語としての意味機能に深く根ざしたものであると考えることは、いささかためらわれはする。このあと、仏教語ふうな語彙や表現を物語は点綴するのであるが、この場合は、そういう本地垂迹的な考え方を背後に十分意識した形ながら、物事の本体・本質といった意に用いられているのだろう。その物事の本体・本質を―つまり現象面・表面でなく―、こうであろうか、このようであろうかと問うてみることが、人としての心のありようとして秀れたところであるというのである。しかも姫君は、これらの発想を実践してみようとする。ここにこの姫君の独自性があり、現代のわれわれにとっていたく実存的に映る所以があるのだろう。姫君はおそろしそうな虫をたくさん集め、「これが、成らむさまを見む」、つまり、成長変化の姿を観察しようとする。成長変化のさまを見ようとするのは、動的な視点を持つことを意味し、当然それは成長・変化の一極に過ぎない成虫である蝶の過大な評価のされ方を、一面的であると判断する根拠にもなってくるのであろう。[注12] 仁徳記によると磐姫の后は、奴理能美の家で、三色（みくさ）に変わるふしぎな虫（蚕）の姿を目のあたりにしていた。そこでの平板な記述にくらべて、この姫君の視点はなかなかに鋭い。さて若い侍女たちは当然これについて行けず、姫君は男の童を使う。採取した虫の名を聞き、名のないものには命名してやったという。対象として認知したことになるのであり―姫君は垣間見をし歌を贈ってきた人物について、対象認知をしていない―、姫君と虫との共存の異様な世界が構成される。

更に姫君の持論が知らされる。「人は、すべて、つくろふ所あるはわろし」またぞろ「人は」と対象世界の認定をする。「つくろふ」という具体的な内容はすぐ次に、姫君の行動を通して述べられるのだが、生地の良さ・本質の大切さを姫君は自らのありようで示そうとする。す

なわち、「眉、さらに抜きたまはず、はぐろめ、さらに、うるさし、きたなしとて、つけたまはず」催馬楽眉刀自女は「御馬草取り飼へ　眉刀自女（眉刀自女のみ七回くり返し）」とうたう。眉を抜かぬおかみさんは、馬の飼い料になるぐらいの眉毛ぼうぼうなのだ。また、お歯ぐろもしない。当然白い歯を見せてよく笑う。今日ふうに言えば、健康な美人なのであった。しかし、こういう具体的な事柄をあげて姫君の、「つくろふ所あるはわろし」を裏付けることで、いったい何が言われようとしているのだろう。それは、幼女から女への推移の段階に対する異議申し立てなのではなかったか。「かしづきたまふこと、限りなし」といわれた親たち、また侍女たちは、当然姫君の結婚を将来のありうる事態として考えていたであろう。姫君は、「うるさし、きたなし」という。半ば意識的に、成虫になろうとすることを拒絶しているのだ。まさか本能的に、男はいやだなどとは言うまい。姫君らしく、「うるさし、きたなし」というレベルでやんわりと自己主張をしているのではないか。主題をめぐっての項で述べるが、幼女の期間から女への段階が、極めて重い何かを孕んでいることについて、藤井貞和氏の発言に耳を傾ける必要がありそうだ。[注13] かつて益田勝実氏が、本朝皇胤紹運録の記述をもとに紹介された、醍醐天皇の第三十九子、白髪童形の男子（嵯峨の隠君子）の女性版とでも言えようか。[注14]

姫君は、虫をこわがって逃げまどう侍女たちに大声をあげて叱責する。姫君の徹底した生活ぶりなど、侍女たちの理解しうるところではなかった。姫君が他者から浮き上がってしまうのはもっともなのである。親は虫を好むことを異様であると思うものの、何か娘は考えるところあってのことだろうと、一面の理解も示す。しかし、常識の世界には勝てない。「人は、みめをかしきことをこそ、好むなれ」と、姫君と同じように、「人は」と切り出す。世人の評判には戸が立てられない。姫君は一向にかまわないことだという。そして、「よろづのことどもを尋ねて末を見ればこそ、ことは、ゆゑあれ。いとをさなきことなり。烏毛虫の、蝶とはなるなり」と断じ、毛虫の成虫になるさまを現実に親に見せる。姫君は、万事という。毛虫はいわばその一例なのだ。方法論として追尋するすべは—事どもの「とも」に「もと」の異文がある。[注15] 文脈から言ってそのように理解すべきであろう—、はしとはしとではだめで、その因果関係もしくはプロセスを見ることこそが大切だという。己れが目で見るという実証を大切にする発想法が、この姫君には顕著である。必ずしも十分に言いえているとは思えないが、この私だって今に変身するかも知れない。成虫・蝶となるかも知れない。蝶めづる姫君と現象的には何ら変わりない存在となるかも知れない。しかし違うのは、その因果関係・プロセスをわきまえているかどうか。人にそれが見えますかどうか。それがまだ分らない内は、「鬼と女とは、人に見えぬぞよき」[注16] とでも言っておかざるをえないだろう。そんなことを姫君は考えていたかも知れない。

さて、親たちとのやりとりはひとまず置かれて、侍女たちの姫君に対する想いと、それを制する女性の発言が姫君の反応抜きに記される。後者はいわば姫君の気持ちを代弁したもの。かは虫がもぬけて蝶となるのだ。「そのほどを尋ねて」虫を好んでいらっしゃるのだという。ただこれも説得力は持たない。男の童に物をやって虫を集めさせる。かは虫・いぼじり・かたつぶり・けら・ひき・いなご・やすでなどが集められた名ある虫であったらしい。姫君は、「烏毛虫は、毛などはをかしげなれど、おぼえねば、さうざうし」といって、いぼじり・かたつぶりなどを取り集めて大声でうたわせたという。梁塵秘抄・四句神歌（巻二・雑）の、「をかしく舞ふものは、巫・小楢葉・車の筒とかや。平等院なる水車、囃せば舞ひ出づる蟷螂・蝸牛」をおそらくうたったのであろう。故事や典例となる詩歌に、かは虫に取材したものがないというあたり、そして典例を持って考えられた例が、純粋の和歌ではないことも、素材から見て当然ではあるものの、姫君の—作り手の—教養を示すくだりともなりえているのであろう。

姫君の噂はついに親の懸念のとおり世間の評判になる。上達部の男子が登場し―この段階で彼は右馬佐という名称を得ていない―、姫君に帯を蛇に似せて付け物として歌を贈ってくる。ところでこの風変わりな恋の物語には、季節感を示す事物がほとんど出てこない。虫が、「日にあぶらるるがくるしければ」という、夏かと思われる記述のほかは、ほぼないといって良い。このことが実は蛇などを、恋歌の付け物として使える状況を生み出すことになる。無季故に、異例の取り合わせが可能になったのだと思われる。さて虫を好む姫君になぜ蛇を持ってきているのか。蛇を長虫とも称するのが、いつごろからなのかよくわからないが、虫の一類だとする発想はあったのだろう。徒然草二百七段に、亀山殿建設の時にあらわれた数知れぬ大きな蛇を、徳大寺右大臣公孝が、「王土にをらん虫、皇居を建られんに、何のたたりをかなすべき」といって大井河に流して、更にたたりもなかったとする話はまさにそれであるといって良い。また、蛇に転生する人間は説話文学に例は多く、姫君が、「なもあみだぶつ」と唱え、「さうぜんのおやならむ」と声をふるわせたのも、その意味になお明瞭性を欠くにしても当然の類推であったと言えよう。虫に執心する姫が、次の世に蛇をも含めた虫に化す可能性も、実は十分に考えうるのであった。

異様な事態に父親は太刀を持って走ってきて、その作り物であることを観破し、姫君にしかるべき返事をしてやるように命じて退場する。姫君は、「いとこはく、すくよかなる紙に」、「かたかんなに」、「ちぎりあらばよきごくらくにゆきあはむまつわれにくし虫のすがたは　福地の園に」と書く。そのさまに、右馬佐は興味・関心をそそられて垣間見に進展する。このかたかな歌の理解について、築島裕・小松英雄両氏に好論がある。築島氏は、平安時代のかな修得の順について、かたかなからひらがなへととれる可能性のある例としてここをあげるが、他に類例を見ないと慎重な判断を示された。また、西念の極楽願往生歌と醍醐寺五重塔落書のかたかな書きの和歌を示され、訓点語の世界に開花したかたかなが、和歌の表記に用いられ、しかもいわゆる古筆切の中に、かたかな歌の例がない事実をどう捉えたらよいか、問題を提起されたのであった。[注17] また、小松氏は、徒然草六二段延政門院の歌とかかわらせてこのくだりを解読されたもので、表音的なかたかなの歌であることによって、「マツワレニクシ」の本文が、「まづ我憎し」と「纏れ憎し」との掛詞として機能する意味構造として捉えられるのだと結論された。[注18] 従うべき見解であろう。更に氏は、「かなは、まだ書きたまはざりければ」を、いわゆる連綿体のひらがなの修得が未だしいことをいうのであって、ひらがな自体は十分理解していたであろうと説明された。別に、氏の稿による日本古典文学大辞典「手習歌」の項の、源氏物語若紫の巻の幼少の紫上のさまをもとに、放ち書きの段階から続け書きの段階を説明された内容を加えて、この部分の理解に盤石の条件を提示されたものと考えてよい。すなわち姫君は、かつて梁塵秘抄の一句を引いてうたったが如く、極めて高い教養の持ち主なのであって、男からの無躾な付け物の文に対応して、わざとかたかなにふさわしい―連綿のひらがな、また世の常識にふさわしくない―こわくすくよかなる紙を用意したのでもあった。なおこのかたかな歌について、北山久備の「勇魚鳥」には、狭衣物語巻一上の歌を併せ引く。その部分、五月四日の夕、狭衣が内裏退出の途次、あやめ葺く家々の中から、「知らぬまのあやめはそれと見えずとも蓬が門は過ぎずもあらなむ」の歌を書き届けた女に対して、狭衣は、「畳紙に片仮名にて、見も分かで過ぎにけるかなおしなべて軒のあやめのひましなければ」と返しているくだりであるが、ここに古典全書本の補注は、巻三下・巻四上の同じ狭衣の書いたかたかな歌の例もあげて、「当時の流行か」とし、参考として、虫めづる姫君のこの部分を引き、「これは、私は片仮名しか知りませんといふ皮肉な謙遜か」としている。かな修得の順序が問題になりそうではあるが、興味深い理解である。

なお、この姫君のかたかな歌は、歌の構造そのものが付け文ととも

にあった男の歌と相似しているのも見事であるし、添え書きの、「福地の園に」も、源氏物語若菜上の巻で、明石の尼君の述懐、「尼君もただ福地の園に種まきてとやうなりし一言をうちたのみて」という一句にあらわれる語句と同じものを用いているわけだが、これは河海抄などがひく、引歌―証拠不明―の有無はともかく、善根を積んでといった意味であるべく、和歌の、「ちぎりあらばよきごくらくにゆきあはむ」の文言と共に、この世での契りの可能性の全く考えられない、男・女のありようを言ったものであって、男歌に対して切りかえした手きびしい姫君ならではの言表であった。

垣間見られた姫君は、「かくまでやつしたれど、見にくくなどはあらで、いと、さまことに、あざやかにけ高く、花やかなるさま」であり、「いと清げに、け高う、わづらはしきけぞ、ことなるべき」さまであった。異風なありさまではあるものの、け高いようすは特に目立つものであった。取りつきかねる気品を、姫君は備えていたことが強調されているのである。姫君は、「ねりいろのあやのうちぎ一かさね、はたおりめの小袿一襲、白きはかま」を好んで着ていた。はたおりめの模様については先に触れた。貴族文化の好尚の選択肢中に存在するこの虫は、衣裳（―姫君の身を包むものとしての―）のデザインの中に、標本のように、化石のように存在しているのであった。白き袴も更にその延長線上に把握さるべきものであろう。ふつう紅の袴着用の貴族の姫君の、思い切った常識逸脱である。次の文にあらわれる白き扇も、その文脈で読まれるべきであろう。先にも触れたように、班婕妤の逸話の象徴的な事物である、秋の扇・白扇こそは、源氏物語東屋の巻の浮舟の持ち物が示すごとき、あやにくなる男女関係を象徴するものであった。それに彼女は漢字の手習いをする。和漢朗詠集にのる班婕妤関係の詩でも書き付けていたかも知れない。つまりこのあたり、書かれるものすべては常識のレベルからの離陸を示しているのである。なお、「練色の綾」について、古典大系本の補注は、枕草子「きたなげなるもの」、今昔物語集巻二十七第七話、大鏡兼通伝の例をあげ、「四十年配の女性が着るようなもの」としている。別に、宇治拾遺物語巻五ノ八、実子にあらざる子の事の内には、「鬢はげたるをのこの、六十余ばかりなるが（中略）打ちたる白き狩衣に、練り色の衣」を着用しているさまが書かれている。おそらく、若い女性の着用にふさわしい色彩のものではなかったであろう。姫君を取り巻く事象は、さま異と言わざるをえないのである。

姫君の、物語での最後の発言は、右馬の佐から草の汁で再び歌が贈られてきたのに反応する女房たちに対して、「思ひとけば、ものなむ、はづかしからぬ。人は夢まぼろしのやうなる世に、たれか、とまりて、悪しきことをも見、善きをも見、思ふべき」という、ほとんど悟り澄ました高僧のようなことばであった。「思ひとけば」の語意は、表現をめぐっての項で申し延べたとおりである。この相対的な感覚の鋭さにおいて、男・女の恋愛沙汰などは、それこそ夢幻のようなものとなってしまうだろう。男の目にさらされ、親・侍女たちの期待を一身に受けていた姫君は、それこそもぬけて、人間世界をはるかな違った存在から見通しているような感じさえする。古代物語史に登場する女人像として、まことに珍しい存在であったといってよいだろう。

五　主題をめぐって

主人公の造型を通して、この姫君の物の考え方には、いくつかの顕著な特性をあげることが可能となってきている。たとえば、無名の虫に名をつけたり、立蔀のもとで垣間見するものの存在を知らされた時、男の童に、「かしこに出で、見てこ」と指示を与えて、その真偽を確かめさせたあとで母屋に入るような言動のありようを通して、対象認知に聡い人間像であることが知らされる。また、親が、毛虫を飼うことに難色を示しながらも、「思しとりたることぞ、あらむや」と一目置き、

姫君自身も、「思ひとけば、ものなむ、はづかしからぬ」と言っているくだりは、姫君の事象把握の客観的な正当性をわれわれに印象付けるであろう。更に、かは虫のことを、「おぼえねば、さうざうし」と言っているところなどは、原拠・依りどころあっての判断・理解を心がけた姫君のありようを示すものであるといってよい。表象面で、風変わりなことをあれこれ言われている姫君の存在は、見方をかえていえば、極めてきびしい自己規定のもとに立ちあらわれているのだと言って、さしつかえないのである。このような書き方を支えている原理は何であったのだろうか。

それはたぶん、本地と、仮りに名付けて仮象とのあり方を基本としている物の見方であるといってよいだろう。物事の真実の姿と現象の姿といってもよい。この二元的な考え方は、蝶めづる姫君と虫めづる姫君とのそもそもの登場の場に明示されていたのでもあった。姫君のことばをかりて価値的にいえば、「人びとの、花、蝶やとめづるこそ、はかなくあやしけれ。人は、まことあり。ほんぢ尋ねたるこそ、心ばへをかしけれ」ということであり、世の常識に対しての異義申し立てでもあった。この二元のありようは、物語中にいろいろな形で提示される。化粧をしないということは、その対義である化粧の代表—表面目につく—としての歯ぐろめ・眉のそり落しを、うるさし・きたなしという理由のもとに切りすてることによって、現象と真実のありようを我身に則して言いおおせているとみてよいのだし、「あやしき女どもの姿を」して、姫君を垣間見する男たちの様子は、そのようなやつした、つまり仮象の姿を借りることが、真実身に到達しうる便法であると読めることになるのである。このような考え方を、この物語の作り手はどこで手に入れたのであろうか。「よろづのことどもを尋ねて末を見ればこそ、ことは、ゆゑあれ」事を事たらしめている本質は、こうしてわかるのだと言おうとしているらしいこの発想は、たとえば、「春を画図するに、楊柳桃李を画すべからず。まさに春を画すべし」とした、正法眼蔵の一節[注19]の言うところに近いのではなかろうか。それはまた、西行が若年の明恵に説き残していった、「此の歌即ち是如来の真の形躰也[注20]」と同じく、現象面・仮象面を通して、真実なるものに想いを凝らそうとしている人たちの心とことばに通じる発想を感じるのである。

改めて姫君は、「烏毛虫の、蝶とはなるなり」という。かは虫と蝶とは決して異った存在ではない。因果の論法とは言わないまでも、変化・変身の過程を置いて、見苦しい毛におおわれた虫は、美しい蝶になるのであった。仮象と真実身は異った存在ではない。姫君に言わせれば、人は仮象にとらわれて真実身を見る目をくもらせているだけなのである。このことは同時に、虫めづる姫君が、蝶めづる姫君と異った存在でないことを論定してよいことにならないだろうか。「めづ」という行為において、常識の世界が評価しているのはもちろんのこと、花や蝶やの世界ではあった。それは、この物語で具体的にいえば虫の変化した姿であった。虫めづる姫君は、自分がやがて変身・脱皮して蝶めづる姫君と同じようになる可能性を—親・侍女たちの期待はまさにそこにあった—持たされていた。化粧したら美しくなるだろうとは、垣間見した男の感想である。姫君は意識的にその変身の過程を虫どもに代置しておいて、自らはその陰に身を隠して遂げようとしない。眉を抜かず、歯ぐろめをつけないのは、成人の女性への時間を目の前において、それから身を翻して、童女の段階に自己を宙ずりにした状況にある。藤井貞和氏が、三角洋一氏の説をもとに説くように、女性の成長の過程を、たとえば〈13〜17〉歳と〈18〜24〉歳のように、ある時期をもとに区切って考えることができるならば[注21]、その一つ一つの時期・時期の一回性を、単なる他への階程と見なさない形で、意識的に守ることによって、一回性はそのまま純粋になりまさり、永遠性に途を拓いて行くことになるであろう。その一回性の中に、姫君は自己をはめこむことによって、その持つ時間は凝固され、永遠性に通じる型をと

るに到ったと言えまいか。つまり姫君は、未知の世界の到来を予見できる少女たちの、成女への怖れと願望とを、いささか逆説的に示しえたと言えまいか。作り手を男ではないかと私は先に言ったが、読み手としての対象は、その時期の女子であるとしてよいのではないだろうか。すくなくとも、歌合の席上で披露されるような作品ではないと言ってよいだろうと思う。

注1　コードとコンテクト「文学テクスト入門」第四章。
注2　宗祇袖下「続群書類従」第十七輯下。
注3　以下、虫めづる姫君物語本文の引用は、日本古典集成本―三手文庫本―による。但し、私に改めたところがある。
注4　この点については、石田穣二氏「物語の大尾の形式について」文学論藻・五四号・昭和54年12月　にくわしい。
注5　小学館古語大辞典「愛す」の語誌欄による（宮地敦子氏稿）。
注6　今鏡・かう人の遊び。
注7　巻十九・蟲多類。
注8　日本国語大辞典同項の例文引用書目。
注9　山家集・下・無常十首の内。
注10　金槐集・下・雑。
注11　辻善之助・日本仏教史・第一巻上世篇によれば、本邦史籍に於ける本地垂迹思想の初見は、石清水八幡宮所蔵文書承平七年十月四日太宰府牒であるという。なお、垂迹という語の本邦史籍に於ける初見は、三代実録貞観元年八月二十八日の記事であるという。
注12　法華経にいう童女成仏・変生男子の発想が全くないとも言えぬが、論究はむりであろう。
注13　少女の物語空間「物語の結婚」所収。
注14　心の極北「火山列島の思想」所収。
注15　李花亭文庫本、岡本保孝旧蔵本など。
注16　みちのくになとりのこほりくろづかといふ所に、重之がいもうとあまたありとききていひつかはしける　みちのくの安達原の黒塚に鬼こもれりときくはまことか　兼盛　拾遺集・雑下　のように、鬼と女の取りあわせの例はある。
注17　仮名　日本語の世界5。
注18　徒然草抜書。
注19　梅華篇。
注20　栂尾明恵上人伝記・上。
注21　注13に同じ。三角氏の論は、「歌まなびと歌物語」国語と国文学・昭和58年5月。